

人口問題研究

第一卷 第二號

研究

將來人口の計算に就て

中川友長

論ぜず、前者即ち Denette の所謂將來に於ける人口の發展を計算するものを主題とする。

(註一) Denette : Die Berechnungen über die künftige deutsche Bevölkerungsentwicklung, 1938. ss. 13—14.

Denette は、此の將來に於ける人口の發展を計算するものを更に

- (1) 其の計算値をして將來に於ける實際人口に可及的近からしめんことを目的として計算するもの
- (2) 將來に於ける人口の最高値及最低値を與へ、將來の實際人口は此の間の値となることを目的として計算するもの
- (3) 其の計算値と將來に於ける實際値との間に一定の關係を保たしむることを少しも目的とせず計算するもの

P. J. Denette は、人口の動きに關する計算を分つて二場合とし、將來に於ける人口の發展 *Entwicklung* を計算するもの即ち *Prognose* を行ふものと、人口の現況より指示せらるゝ所を一定の人口類型に比較對照して現在に於ける人口の増加力を知る爲に計算するもの即ち *Diagnose* を行ふものとなして居る。(註二) 此の後者は、之を單的に言へば、恆久的に人口を保持するといふ見地から自然的な人口動態の現在に於ける強さは如何にして判定せらるゝかといふ問題に答へんとするものであつて、之が爲所謂靜止人口とか又は安定人口とかいふやうな人口の類型を用ひて、此等の類型狀態に於て示さるべき人口動態の諸計數値と、人口の現況が示すその値とを計算比較する等のことを行ふものである。併し本稿に於ては、此の部分は之を

將來人口の計算に就て

の三つに分つて居る。(註一) 從來に於ける將來人口計算の多くは、此の三つの中最初の二つの何れかに屬するものとなつて居る。最後の場合即ち(3)は、一見其の實用性を疑はしむるが如きものであるが、之は人口の動きを決定すべき根本要因の動向に一定の假定を置き、此の假定の下に於ては、將來人口は如何に發展するかを與へるものであつて、之に依り我々は人口對策に關し重要な示唆を受くることとなるのである。尙此の場合に於て、人口の動きを決定すべき根本要因の動向に關し置かるゝ假定に付ては、此の假定通りのこと或は之に近いことが將來實現するとは原則として全然考へられて居らない。従つて之に依る將來人口の計算結果が與ふる示唆に依

り人口對策が行はれ、實際の將來人口が此の計算結果と相違するに至ることが生じても、それは此の計算者にとつて少しの不名譽ともならぬのである。此の點が(3)と(1)又は(2)と甚だ異なる所である。(1)又は(2)にとつては豫測が其の主目的であるから之が適中せぬに於ては其の價値は減殺せらるゝこととなる。之に反し(3)は上述の如く豫測を行ふものではなく、之が計算を爲す者は、Carr-Saundersの述ぶるが如く「豫言者ではない。——彼等は將來、事實生ずるであらうことを云々するものではなく、單に一定の假定の下に於て生ずべきことを指摘するものである。之れ恰も一時間三哩の速さで通り過ぎて行く者を見て、彼が其の速さで一時間一直線に進むならば、一時間後に彼は三哩離れた地點に在るに相違ないと言つても豫言者の仲間に入らぬと同じである。」(註二)のである。

(註一) Denefle: Berechnungen, s. 25.

(註二) Marshall and others: The Population Problem, 1938, pp. 75-76.

從來上記(1)又は(2)の立場から人口の豫測即ち將來人口の推計をなす爲に最も多く用ひられた方法は、推計時に至る過去何年間に於ける人口の動きに依り人口の年平均増加數又は年平均増加率を求め、之を所要年數だけ、最近の實際人口數に加ふるか又は乗ずるかして將來人口を計算するものであつて、例へば比較的最近迄米國の國勢調査局が同國人口の推計に用ひた方法は、此の過去に於て示された年平均増加數を加へて行くものであつたし、又内閣統計局が我國人口の推計に昭和九年迄用ひた方法は兩回國勢調査人口間に計算せらるゝ幾何的年平均増加率を乗ずるの方法となつて居つた。米國に於ては、上述の方法に依る推計人口が當初の間は相當良結果を示して居つたのであるが、近時に至り實際人口を過小に見積るの傾向を現はして來たので用ひられぬことになり、又内閣統計局に於ては、同局が人

口推計に用ひ來たつた「從來の方法は、過去の實績に基き將來の人口を豫測するものであつて、過去の實績と同一なる状態を以て將來も亦人口が増減するものであるとの前提の下に立脚するものであるが、人口の増減は必ずしも過去の實績と同一の歩調を辿らざるに依り、試みに算出したる國勢調査年次の推計人口と當該年次の調査人口との間に若干の開きの生ずるの亦已むを得ない所である。扱て我國に於ける人口の實増加を考察するに、其れは殆んど出生、死亡に依り左右せられてゐる實狀である。勿論内地外との人口の出入も亦總人口の増減に影響を及ぼす一因ではあるが、其の影響は出生、死亡の差増、所謂人口自然増加に比すれば極めて僅少と思料せられるのである。而して此の人口自然増加は年に依り相當の變動があるから、毎年推計人口を實際の人口に近からしめんが爲には、從來の方法の如く、過去の實績に依る増加率に依つて逐年同一割合で増加すると假定したものよりも寧ろ實際の増加状態を盛り込んだものを以て推計の基礎とするのが良いのであつて、之が爲には毎年の出生、死亡を利用するより外にあるまい。」(註一)との理由で、從來の方法は昭和九年限りを以て中止し、昭和十一年よりは新しい方法(註二)が用ひられることとなつたのである。

(註一) 内閣統計局「統計時報第六十二號一五頁。

(註二) 此の新しい方法は、上掲文からも察知せらるゝ如く、基礎年次の十月一日人口に、其の年十月乃至翌年三月の届出出生數及死亡數に厠洩を夫々推計附加したものを加除して、翌年四月一日人口とし、之に最近五箇年の平均に依り推計せる人口の四月乃至九月の自然増加率(一)を加へたるものを乘じて、翌年十月一日人口とするの方法である。(統計時報第六十二號十五頁参照)

上記二方法は、之を式で表はせば

$$y_t = y_0 + At$$

及

$$y_t = y_0 \times (1+r)^t$$

となる。但し y_t は t 年人口、 y_0 は基礎年次 t_0 の人口、 A は過去の年平均人口増加数、 r は同年平均増加率である。今此の A 及 r をパラメーターと考へれば、此の二方法は上記二式の各パラメーターを過去の経験に依り最小自乗法を應用して定め、之を將來に迄延長するものであるといふことが出来る。然るに過去の人口趨勢を與ふべき式は之を上記の二式に限る理由は無いから、之をより複雑精緻なるものとするのが考へられて来る。此の如きものとして三次の拋物線

$$y_t = A + Bt + Ct^2 + Dt^3$$

が屢々用ひられ、又 Pearl 及 Reed に依つて

$$y_t = a + bt + ct^2 + d \log t$$

なる式が用ひられ、内閣統計局に於て大正十五年首乃至昭和三十四年首各年首我國人口の推計に

$$y_t = \frac{y_0}{a} (a + bt + ct^2) \exp \left[-\frac{1}{2\pi} \left(k_1 \cos \frac{2\pi}{13} t - k_2 \sin \frac{2\pi}{13} t - k_3 \right) \right]$$

なる式が用ひられたことがある。尙統計局式に於ける各パラメーターの値は、明治六年乃至大正十四年の長期間に互る経験に依り定められたのである。

此の種の人口方程式で、最近特に注目されたものとして、Logistic Curve

$$y_t = \frac{L}{1 + e^{-\frac{t}{a}(y_0 - L)}}$$

がある。之は説明する迄も無く、Verhulst の創意に基づき、Yule や Pearl 等に依つて發展せしめられたものであつて、人口が自由に、障害なく發展し得る場合には人口は幾何的に増加するものであるが、'Etat sociale' が變化

將來人口の計算に就て

せずには止まれば、人口は次第に増加速度を減じ遂には静止状態に達するに至ると S. G. Quetelet の命題を其の根底に置くものである。

以上の方法に依る將來人口の推計値が實現する爲には、人口の變動を決定するすべての基礎的條件と人口との關係が將來に於ても過去の通りである即ち Greenwood の言を藉れば the continuance of the same conditions of growth があることが必要である。併し此の如きことは極く短期の將來に於て存在可能であるが、少しく長期に及べば存在し難いことは事實の證する所である。(註一) Thompson 及 Whelpton は二十年以上に渉る extrapolation は困難であるとし、(註二) Deneffe はもつと甚しく、wenige jahre にしか及び得ないと、(註三)又 Benser は上記の補外に對する効果を否定し「此の如き算式を用ふる價値は、補間の場合に於てのみ存在し、補外及補外より得らるゝ結果は實用性も正確性も主張し得ず」として居る。(註四)

(註一) 曾て Pritchett が米國人口の推計に用ひた式に依れば、西紀二九〇〇年に米國人口は四百十億となることになつて居るやうである。又 Gregory King は一六九六年に、當時の事情から、イングランドの人口は西紀三五〇〇年に二千二百萬に達すると豫測したが、イングランドの人口は一八六〇年代の初めに早くも此の數に達したのである。

(註二) W. S. Thompson and P. K. Whelpton: Population Trends in the United States, 1933, p. 313. 此の著者は「一定の算式が過去の人口増加狀況を殆ど正確に與ふるから」と言つて、それは算式が確實に將來の豫測をも正確に與ふるやうなものである」と言つて居る。

(註三) Deneffe: Berechnungen, S. 34.

(註四) Bid, s. 36.

尤も此の點は Logistic Curve の場合に於ては少しく異なる。此の場合に於ては上述の基礎的條件と人口との關係を不變とは置かず、之を次第に變ず

るものとして居る。即ち人口の基礎的條件に對する關係は人口増加の方向に次第に一定の形で不利になるとして考へられて居る。併しそれにしても Logistic Curve のパラメーターの決定は、過去の事情を用ひて行はれるのであるから、結局の所に於ては他の場合と同じことになる。尙 Logistic Curve の場合に於ては、之が成立の基礎條件が變化すれば従来の Logistic Curve に新しき Logistic Curve を附加することが必要であるとされて居るが、Thompson 及 Whelpton の述ぶる如く、(註一)何の年に新カーブを附加するを要するかを決定するのは極て困難であり、之は後年に至つて始めて容易に行ひ得る所となるのである。

(註一) Thompson and Whelpton: Population Trends, p. 313 参照。尙此の兩著者は、Logistic Curve に依る一九五〇年米國人口の推計値は高きに過ぐるとして居る、其の理由は其の後に於て急速なる出生率低下が生じ來つたこと及移民制限が實施せらるゝに至つたことである。

Denette は戦争とか疫病流行とか等の突發に依つて人口のビオロギシな發展は擾されるが、此等の事情は上述の方法中に取入れられては居らなす。併し此の如き人口の Störungsstase にこそ將來人口の推計の必要性と重要性とがあるのであると言つて居る(註一)が、之は從來の人口推計法の何れに於ても解決せられて居らぬ所であり、又此の要求を満足する爲には、あらゆる事に對し豫測可能となることが先決問題となるであらう。

(註一) Denette: Berechnungen, s. 34.

以上の如く、將來人口の推計として行はれて居るものは、過去と同一事情の繼續ありと假定すれば斯くあるべし計算を行へるものである。従つて之より其の計算結果通りのが將來實現すとの信念を取り去れば、之は前述將來人口計算場合の(3)に歸着することになる。併し今日(3)の計算と

して通例行はれて居るものゝ用ふる方法は、上記の將來人口推計法とは異つたものとなつて居る。此の方法を Denette 等は Biologische Methode と稱して居るが、簡単に説明すれば、女子の年齢別出生率、年齢別死亡率及社會移動(社會移動は省略されることが多い)の將來に於ける状態に一定の假定を置き、之より此の假定下に於ける將來人口を算出する方法である。即ち過去と同一の事情といふ如き漠たる假定を置かず、之を出生、死亡及社會移動に迄分解したものである。Denette の述ぶるが如く、人口動態要素中死亡率は最も高い蓋然性を以て其の動きを豫測し得るものであり、出生率は之よりは相當劣るも之に次ぐ高い蓋然性を以て其の動きを豫測し得るものであるから、(註一)従つて此等のもの就中死亡率の状態に假定を置くことは比較的容易であり、又此の假定を相當實現性に富むものとすることも亦可能である。勿論社會移動に付ては此の如きことは言ひ得ないが、此の要素が餘り重要ならざる場合には、以上の如くであるから此の方法は前述(1)又は(2)の將來人口推計の方法としても重要なものとなるのである。Thompson 及 Whelpton は「米國にとり、他の方法に比し任意的なる程度は同じであるが、一層有效なる將來人口の推計方法は、出生率、死亡率及純移民に關し夫々別個に假定を置いて、其の結果生ずべき將來人口を計算する方法である」と述べ、(註二)又上述内閣統計局の人口推計法の改正と言ひ、近時此の方法が多く用ひられて來たことは故あることである。併し此の方法を前述(1)又は(2)の見地から用ひるには、設定したる假定の實現性に關し豫測を行はねばならぬが、豫測は一般に困難なる事柄であるから、之を(3)の見地から用ふるものが次第に多くなりつゝあるのである。其の最も著名の例に、獨逸統計局の計算及 Charles の計算がある。獨逸統計局の計算は今日迄三回に互つて行はれて居るが、其の第一回は一九二六年

に行はれ、一九二五年乃至一九七四年五十年間の人口が計算されたのである。此の計算は三通り行はれたのであつて、各通りを通じ此の五十年間に於ける死亡率は一定（一九二二年乃至一九二三年の平均に同じ）、私生児出生数も一定（一九二四年乃至一九二五年の平均に同じ）と假定されたのであるが、公生児出生に付ては、（イ）私生児出生数の場合と同様出生数一定、（ロ）公生児出生率一定（一九二四年乃至一九二五年の平均に同じ）、（ハ）公生児出生率は最初の三十年間に二五%の割合で、三次拋物線に従つて漸減し、爾後不變の三つの場合を假定し、夫々の場合に付て計算が行はれたのである。而して第二回（一九三〇年）、第三回（一九三七年）の各計算も第一回のものど、計算の基礎資料の年次を別とし、大同小異のものとして行はれたのである。

Charles の計算は、英蘭及威爾斯の人口に付て行はれたものであつて、矢張り三通りの計算が試みられて居る。其の一は妊孕率及死亡率を一九三三年當時のものと同様と假定するもの（英蘭及威爾斯に於ては一九三三年當時の女子年齢別出生統計を缺く）、Charles は一九三二年の瑞典の同種統計に現はれた割合に依つて、一九三三年英蘭及威爾斯の出生總數を女子の年齢に按分し、之に依つて妊孕率を計算したのである、其の二は二〇歳未満の妊孕率は一九三三年當時のものと同様であるが、二〇乃至二四歳のそれは五年毎に五%の割合で將來低減し、二五乃至三九歳のそれは五年毎に一五%の割合で將來低減し、四〇乃至四九歳のそれは五年毎に二五%の割合で將來低減する。但し各場合を通じ、低減は一九八五年迄續き爾後は不變となる。一方一歳未満の死亡率は一九三三年當時のものより五年毎に二〇%の割合で將來低減し、一歳乃至六九歳の死亡率は同じく五年毎に一〇%の割合で將來低減するが、七〇歳以上のそれは一九三

將來人口の計算に就て

三年當時のものと將來も同様である。但し各低減場合を通じ、低減は一九六五年迄續き爾後は不變となると假定するもの、其の三は妊孕率は一九三一年當時のものと將來も同様であるが、死亡率は上記其の二の場合と同様、但し低減は一九五〇年迄續くと假定するものである。

（註一） Danette に依れば人口動態要素中其の動きを最も確實性を以て豫測出来るものは、死亡率及出生児の性比であり、之に次ぐものは出生率、戸籍上の身分變更等である。而して社會移動、宗派變更等は最も不確實で豫測困難のものである。（Berechnungen, ss. 19-20.）

（註二） Thompson and Whelpton : Population Trends, p. 314.

二

次に我國人口に付て試みられた(3)の計算例を示さう。

先づ上田博士の計算を擧げねばならぬ。上田博士は、昭和五年の國勢調査報告(抽出法)の發表を機とし、昭和二十五年に至る我國人口の計算を試みられた。其の際、博士は「私の目的は豫言ではない。私のたてた推算上の假定は専門家から見れば極めて大膽なものと考へられるであらうが、我國ではまだかゝる推算が試みられてゐないので、敢てこれを行つて見た次第である。」と述べられて(上田貞次郎編日本人口問題研究第二輯四頁)出生數は毎年不變に三百十萬、死亡率は未正十四年乃至昭和五年當時のものと將來不變の假定(註)に昭和五年國勢調査抽出人口を基準として、計算を進められたのである。此の計算は其の後昭和四十五年迄延長され、且基準人口は確定人口に、出生數は二百二十方に改められた。此の計算結果は次の如くになつて居る。(註一)

昭和五年	六四、四五〇 <small>千人</small>	昭和三十年	八三、八六一 <small>千人</small>
同 一〇年	六八、九一七	同 三五年	八六、八二七
同 一五年	七三、一一六	同 四〇年	八九、四六九
同 二〇年	七七、〇一一	同 四五年	九一、八〇九
同 二五年	八〇、五九八		

(註一) 上田貞次郎「日本人口政策」六五—一二頁。

今一つの計算例として、左右田氏の計算がある。氏は出産率一定(大正十四年女子五歳階級別出生率)・生残率一定(第四回生命表に依る生残率)の假定の下に、大正十四年國勢調査人口を基準として、昭和三十五年に至る人口を計算されたのであつて、其の各五年の結果を示せば次の如くである。(註一)

大正一四年	五九、七三六 <small>千人</small>	昭和二〇年	七五、六六七 <small>千人</small>
昭和五年	六二、九九七	同 二五年	八〇、四三七
同 一〇年	六六、八六〇	同 三〇年	八五、二九二
同 一五年	七一、二二三	同 三五年	九〇、三五二

(註一) 左右田武夫「人口増加の推定(日本人口問題研究第一輯)」

上記二計算は、我國に於ける斯種計算の恐らく最初のものとして貴重のものであることは言ふを要せぬ所である。併し今日に於ては、其の計算に使用された資料は聊々古いものとなるに至つたのであつて、此處に其後の資料を利用し、同様の計算を試みるの意義を生じ來つたと考へられるので、新に二様の假定を置き、昭和十年國勢調査人口を基準とする昭和六十年に至る我國人口の計算を試みたのである。

此の二様の假定中の第一は、昭和六十年に至る各年出生率及死亡率は、夫々昭和十二年の年齢別女子の出生率(註一)及第六回生命表に依り計算したる男女各年齢死亡頻度(註二)に同じ即ち出生率及死亡率を一定とするも

のである。此の假定下に於ける人口は、本誌前號拙稿「安定人口の計算」に掲げた如く増加を続け、其の年齢構成は昭和十年當時のものと大差ないこととなるのであるが、併し此の假定は斯種計算の基本的ものであるが故に本場合に於ても先づ之を試みた次第である。

(註一) 之が計算方は本誌前號拙稿「安定人口の計算」に於ける昭和十二年年齢別女子の女兒出生率の計算と同じである。尙此の年齢別女子の總出生率は次の如くである。

年齢	出生率(人口千に付)
15	0.96
16	4.23
17	11.18
18	28.17
19	56.00
20	100.21
21	141.90
22	183.92
23	216.72
24	234.66
25	243.86
26	251.57
27	246.95
28	235.64
29	227.15
30	218.57
31	220.36
32	204.55
33	201.15
34	189.41
35	177.33
36	163.43
37	150.86
38	141.60
39	118.58
40	104.20
41	84.18
42	62.16
43	43.71
44	28.50
45	16.36
46	9.40
47	5.57
48	3.97
49	3.15

此の出生率を年齢五歳階級毎に纏めたものを、前述左右田氏の計算に用いられた大正十四年に於ける同値と比較表示すれば次の如くである。

年齢級	出生率(人口千に付)	出生率(人口千に付)
一五—一九	一八六四	四一・一七
二〇—二四	一七四・七二	二二八〇八
二五—二九	二四三・二七	二四八・三一
三〇—三四	二〇六・九五	二二八・五八
三五—三九	一五二・一〇	一七二・五八
四〇—四四	六五・九九	七一・六一
四五—四九	七・七四	九・四九

此の昭和十二年の率は十五歳未満並に五〇歳以上の女子に於ける出生及庶子出生を含めて計算してあるが、大正十四年の率には此等は全部含ましめてないから、右の二系列の數字に依り此の兩年間に於ける出生率の低下状況を正しく比較することは出来ない。

(註二) 此の計算は次の算式に依つて行つた。但し下式に於ける q_x は生命表の x 歳死亡率 q_x は x 歳死亡頻度を表示する。

次に前記二様の假定中第二は、上記女子の年齢別出生率中一五歳乃至一
九歳の分は將來五年毎に三〇%、二〇歳乃至二四歳の分は同じく一三%、
二五歳乃至二九歳の分は三%、三〇歳乃至三四歳の分は五%、三五歳乃至
三九歳の分は七%、四〇歳乃至四四歳の分は六%、四五歳乃至四九歳の分
は三%の各割合で夫々減少し、同じく上記年齢別死亡率中零歳の分は男女
共に將來五年毎に二〇%、一歳乃至四四歳の分は同じく一〇%、四五歳以
上の分は五%の各割合で夫々減少するも、死亡率の減少は三十年間に互つ
て生じた後止み、爾後一定となるとするものである。此の如き減少割合を
假定する理由は、出生率に在つては大正十四年及昭和五年間に現はれた其
の減少割合と、昭和五年及昭和十二年間に現はれた其の減少割合との平均
が上記の割合となること、(註一)死亡率に在つては第四回生命表及第五回
生命表間に現はれた男子死亡率の減少割合が

〇歳	一九%	三〇—三四歳	一一%
一歳	一一	三五—三九歳	一三
一〇—一四歳	一九	四〇—四四歳	八
一五—一九歳	一四	四五—四九歳	六
二〇—二四歳	九	五〇—五九歳	五
二五—二九歳	九	六〇—八〇歳	六

であり、第四回生命表及第五回生命表間に現はれた女子死亡率の減少割合
と第五回生命表及第六回生命表間に現はれた同じく女子死亡率の減少割合
との平均が

〇歳	一七%	三〇—三四歳	一二%
一歳	一三	三五—三九歳	一二
一〇—一四歳	一六	四〇—四四歳	一〇
一五—一九歳	一一	四五—四九歳	八

將來人口の計算に就て

二〇—二四歳 一〇 五〇—五九歳 七
二五—二九歳 一一 六〇—八〇歳 五
である點に計算の便宜其の他を考慮したることに在る。

右の割合で死亡率が三十年間低減すれば、三十年目に於ける女子の一五
歳乃至四九歳間の各五歳迄生残する率は

一五—一九歳	〇・九一四四〇	三五—三九歳	〇・八四一九九
二〇—二四歳	〇・八九五五六	四〇—四四歳	〇・八三一九九
二五—二九歳	〇・八七四四〇	四五—四九歳	〇・八一四五二
三〇—三四歳	〇・八六二〇〇		

迄上昇し、此の率を以つてする、五十年後の低下せる出生率に依る人口純
生産率は一を割ることとなる。従つて第二の假定に依る將來人口は昭和六
十年以後暫らくは増加するが、やがて減少に轉ずることが推測される。

上記假定の第一及第二の兩場合を通じ、人口の移出入關係は全然之を考
慮外に置き、猶、男女出生の割合は昭和十二年に於ける其の割合即ち出生
總數百中男五一・一八、女四八・八二に一定すと假定したのである。

第一の假定に依り計算せる昭和六十年に至る各五年將來人口は次の如く
である。

昭和	總數	男	女
一〇年	六九,二五四,一四八	三四,七三四,一三三	三四,五二〇,〇一五
一五年	七四,〇二七,二五〇	三七,一三八,六八六	三六,八八八,五四四
二〇年	七九,二〇二,三九八	三九,七六九,四九二	三九,四三三,九〇六
二五年	八五,二三四,三六二	四二,七六二,九六九	四二,三六一,三九三
三〇年	九一,五四四,三八五	四六,〇〇〇,六三八	四五,五四三,七四七
三五年	九八,二七八,三七七	四九,三七九,四五四	四八,八九八,九二二
四〇年	一〇五,一九三,三七八	五二,八五一,一四〇	五二,三四一,二三八
四五年	一一二,三五六,三八四	五六,四三三,八九〇	五五,九二二,四九四
五〇年	一一九,九六三,七〇五	六〇,二二六,七五八	五九,七三六,九四七
五五年	一二八,一六一,〇八八	六四,二九九,八三〇	六三,八六一,二五八

同 六〇年 一三七,〇〇一,二一一 六八,七三四,一八九 六八,二七七,〇三二

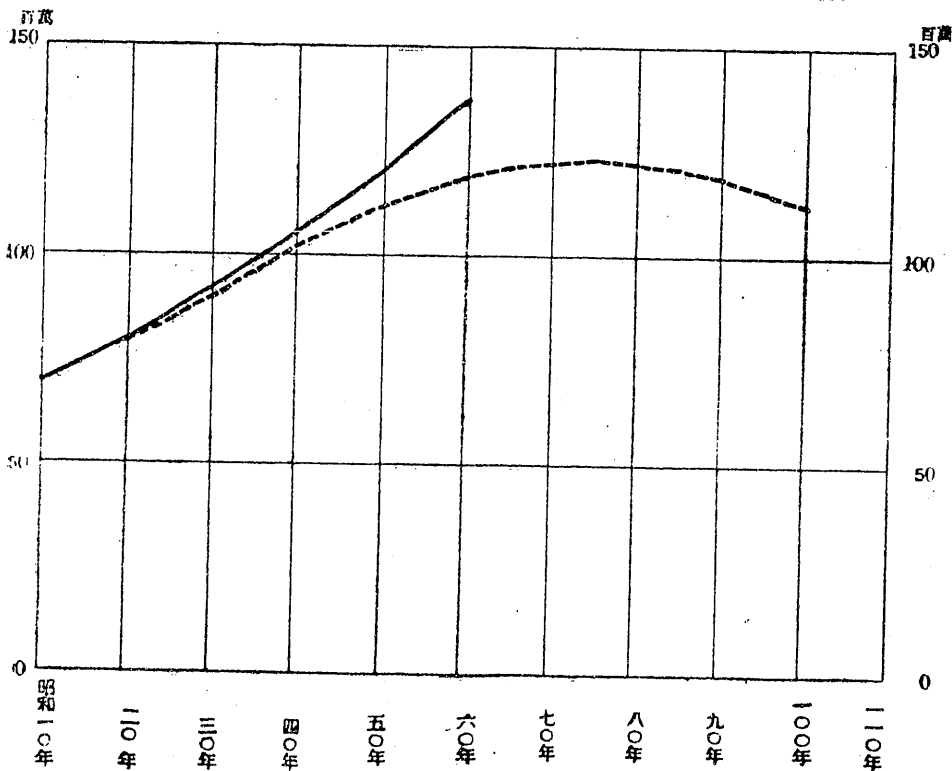
之に依れば我國人口は昭和三十五年と同四十年との間に於て一億に達する。而して昭和六十年即ち昭和十年から五十年後に於て、人口は殆ど倍加するのである。

第二の假定に依る將來人口は次の如くである。

昭和	總數	男	女
一〇年	六九,二五四,一四八	三四,七三四,一三三	三四,五二〇,〇一五
一五年	七三,九三九,二七八	三七,〇九三,五九七	三六,八四五,六八一
二〇年	七八,九八五,五八九	三九,六三五,五二一	三九,三五〇,〇六八
二五年	八四,三三六,四八七	四二,三二九,八〇七	四二,〇〇六,六八〇
三〇年	九〇,一〇七,四三一	四五,二五五,一七七	四四,八五二,二五四
三五年	九五,九五五,七〇一	四八,二〇九,九二三	四七,七四五,七七八
四〇年	一〇一,六〇八,五六七	五一,〇七六,八四八	五〇,五三一,七一九
四五年	一〇六,八五七,九六二	五三,七三五,九七二	五三,一一一,九九〇
五〇年	一一一,四五三,三六〇	五六,〇三三,七三五	五五,四一九,六二五
五五年	一一五,三七九,五九六	五七,九七九,五六七	五七,四〇〇,〇二九
六〇年	一二一,五五四,二〇〇	五九,五〇八,二六八	五九,〇四五,九三二
六五年	一二〇,九一四,〇二〇	六〇,六三一,一〇六	六〇,二八二,九〇四
七〇年	一二三,三二八,四九四	六一,二七五,〇五三	六一,〇五三,四四一
七五年	一二三,七四一,七七七	六一,四一四,六九二	六一,三二七,〇八五
八〇年	一二三,一八六,六八二	六一,〇六三,〇九九	六一,一一三,五八三
八五年	一二〇,七三七,七五〇	六〇,二六五,七八八	六〇,四七一,九六二
九〇年	一一八,四九二,六八五	五九,〇七三,六三九	五九,四一九,〇四六
九五年	一一五,四六五,三八六	五七,四六一,〇〇六	五八,〇〇四,三八〇
一〇〇年	一一一,七七六,七六六	五五,五三九,四二八	五六,二三七,三四八

之に依れば出生率の低下に對抗して死亡率の低下がある爲、人口は第一の假定場合同様昭和三十五年と同四十年との間に於て一億に達する。併し其の勢は第一の場合に比し弱く、第一の場合の人口が昭和六十年に示す一億三千七百萬餘の人口には遂に達し得ず、最高は昭和七十五年の一億二千二百七十萬餘となつて居る。此の年以降人口は減退し始め、昭和百年には

第一及第二各假定に依る將來人口ノ趨勢(實線ハ第一、點線ハ第二)



昭和五十年の人口と略々同数の人口に迄低減する。尙昭和七十五年を境として從來女人口より多數であつた男人口が反對に女人口より少數となり、現在の歐洲諸國に見るが如き狀況となつて居る。

第一の假定に依る將來人口の昭和十年以降各十年の年齢構成状態を示せば次表の如くである。

年齢級	昭和一〇年		昭和二〇年		昭和五〇年		昭和六〇年	
	總數	男女	總數	男女	總數	男女	總數	男女
總數	六九,三三六	三四,五四一	七九,〇三九	三九,九四九	一〇九,〇〇〇	五〇,〇〇〇	一三〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇
〇—四	九,三八五	四,七〇〇	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇
五—九	八,五二九	四,〇〇〇	八,八六七	四,四〇〇	九,〇〇〇	四,五〇〇	九,〇〇〇	四,五〇〇
一〇—一四	七,六五二	三,八七四	八,四九〇	四,二五〇	九,〇〇〇	四,五〇〇	九,〇〇〇	四,五〇〇
一五—一九	六,六四七	三,三〇七	八,九七三	四,四八六	九,〇〇〇	四,五〇〇	九,〇〇〇	四,五〇〇
二〇—二四	六,〇七〇	三,〇〇〇	七,六六〇	三,八〇〇	八,〇〇〇	四,〇〇〇	八,〇〇〇	四,〇〇〇
二五—二九	五,二四〇	二,七〇〇	六,〇〇〇	三,〇〇〇	七,〇〇〇	三,五〇〇	七,〇〇〇	三,五〇〇
三〇—三四	四,六三三	二,三〇〇	五,五七三	二,七〇〇	六,〇〇〇	三,〇〇〇	六,〇〇〇	三,〇〇〇
三五—三九	四,〇〇〇	二,〇〇〇	四,八三三	二,四〇〇	五,〇〇〇	二,五〇〇	五,〇〇〇	二,五〇〇
四〇—四四	三,〇〇〇	一,七〇〇	四,一八二	二,一〇〇	四,〇〇〇	二,〇〇〇	四,〇〇〇	二,〇〇〇
四五—四九	三,二二二	一,五二二	三,七六〇	一,八〇〇	三,〇〇〇	一,五〇〇	三,〇〇〇	一,五〇〇
五〇—五四	三,八三三	一,四〇〇	三,〇五五	一,四〇〇	二,〇〇〇	一,〇〇〇	二,〇〇〇	一,〇〇〇
五五—五九	二,五七二	一,二七二	二,二七二	一,一〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
六〇—六四	一,九〇〇	九〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
六五—六九	一,三〇〇	六〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
七〇—七四	九〇〇	四〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
七五—七九	五〇〇	二〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
八〇—八四	三〇〇	一〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
八五—八九	二〇〇	一〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
九〇—九四	一〇〇	五〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
九五以上	一〇〇	五〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇
總數	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇	一〇,〇〇〇	五,〇〇〇

將來人口の計算に就て

年齡級	昭和一〇年		昭和二〇年		昭和三〇年	
	總數	男	女	總數	男	女
一〇—一四	二,三二四,九四六	一,一四〇,三五六	一,一八四,五九〇	二,三三九,二三五	一,一七二,九三九	一,一六六,三〇六
一〇—一四	一,一三六,七五五	五七二,一五六	五六四,五九四	一,一四九,一〇一	五七六,八六六	五七〇,〇七九
一五—一九	一,〇二四,五四七	五二四,七六一	五〇九,七八六	一,〇四一,五八三	五九三,三五八	六〇六,二二三
二〇—二四	八,七九八,七三三	四,四七九,九六三	四,三一八,七七〇	一〇,〇五六,九七一	五,四七〇,七五五	一〇,〇五二,〇七
二五—二九	七,七〇〇,四四四	三,九三三,七四五	三,七六六,六九四	九,〇〇八,五六三	四,六九〇,六八七	一〇,〇六八,五九九
三〇—三四	七,三九七,七〇〇	三,六三六,〇〇〇	三,七六一,七〇〇	八,〇〇五,九五六	四,一〇〇,九八四	九,六〇〇,〇六六
三五—三九	六,八六〇,一〇〇	三,四九四,四七七	三,三六五,六二四	七,一〇四,二七七	三,六三三,八三三	八,四九三,四六九
四〇—四四	六,〇〇四,〇八〇	三,〇七二,〇〇六	二,九三二,〇七四	六,六九九,九七七	三,三九九,一七九	七,四〇九,八一〇
四五—四九	五,〇五九,九四三	二,五五〇,五七二	二,五〇九,三七〇	六,三九九,九六三	三,一六二,三六六	六,四三四,四五七
五〇—五四	四,三三三,七四三	二,一三三,〇一一	二,二〇〇,七三二	五,三三四,〇五一	二,六六八,五八一	五,八七九,〇三三
五五—五九	三,七五〇,〇九六	一,六五五,〇八〇	一,八九五,〇一六	四,一八九,六〇八	二,〇八七,二八八	五,三〇〇,七四六
六〇—六四	二,九三三,五五四	一,四四五,六九六	一,四八七,八五八	三,五九〇,九九九	一,六七四,九五九	四,三二八,九五八
六五—六九	二,〇六四,七三三	一,〇九二,五五四	一,一七二,一八〇	二,六六二,七六五	一,三三三,五〇〇	三,〇〇八,二六五
七〇—七四	一,四二六,〇七七	六五二,二七二	八二二,八〇五	一,七五二,一一〇	七六三,六七三	二,三九九,四五八
七五—七九	八四二,二九六	三八〇,〇六一	四六二,二八五	九六六,九一一	三八四,七三三	一,二九九,四五五
八〇—八四	五七五,三三三	二六三,三三三	三一二,〇〇〇	四〇三,五七九	一九三,三三一	二〇〇,二四八
八五—八九	四〇一,四三六	一九一,五五五	二〇九,八八〇	一〇八,一四九	五二,一六九	一三六,九七〇
九〇—九四	一〇七,七五七	五三,〇三三	五四,七二四	一五,五九八	三,二九五	八,一〇三
九五以上	一六四	五九	一〇五	三三	〇〇	三三

第二の假定に依る將來人口の昭和十年以降各十年の年齢構成状態を示せば次表の如くである。

年齡級	昭和一〇年		昭和二〇年		昭和三〇年	
	總數	男	女	總數	男	女
一〇—一四	六,九二四,四八〇	三,四七四,一三三	三,四五〇,三四七	七,八八五,五八〇	三,九六五,五三二	三,九一九,〇四八
一〇—一四	九,三二八,一〇〇	四,七二四,一〇〇	四,六〇四,〇〇〇	九,六五一,七四八	四,九二五,九六四	四,七二七,七八四
一〇—一四	八,五三二,四一九	四,〇〇三,二六四	四,五二九,二三五	八,六九四,七四四	四,四三四,〇三三	四,二六一,七一
一〇—一四	七,六八五,二四七	三,八七六,七七四	三,八〇八,四七三	八,四九九,八六七	四,二八七,三七七	四,二一一,五五〇
一〇—一四	六,六四〇,九一七	三,三三〇,〇七三	三,三一〇,八四四	八,二二七,一四四	四,一六,五六九	四,〇六〇,五七四
一〇—一四	六,〇〇一,四七一	三,〇三六,七六四	三,〇六四,七〇六	七,三三〇,〇六八	三,六〇二,三二九	三,七二七,七三九

年齢級	昭和四〇年		昭和五〇年		昭和六〇年	
	男	女	男	女	男	女
二五—二九	二,七〇七,四八八	二,五九九,八三五	三,〇〇五,二〇四	三,〇三九,二四〇	七,〇〇三,七六七	三,八〇八,五九三
三〇—三三	二,三三九,四九一	二,二五三,一四五	二,八〇五,二六六	二,八〇四,一四五	六,七六一,六三三	三,四三三,五五五
三五—三九	二,〇九三,四四六	一,九三三,四〇〇	二,四八八,〇三六	二,三六六,七三六	五,七七八,五七四	二,八六五,二六七
四〇—四四	一,七六七,六七五	一,六三三,八八四	二,二二九,九三〇	二,〇八七,五五三	五,二八一,五六六	二,六四四,五六八
四五—四九	一,五九一,二七九	一,五三三,六五五	一,九三三,五六三	一,七九六,四七〇	四,五六一,二三〇	二,三三七,九七〇
五〇—五四	一,四〇三,三六六	一,四一八,四九九	一,五五三,八七〇	一,四八四,七七九	三,八八九,五三三	一,九七五,三〇五
五五—五九	一,二五七,〇七五	一,二六六,〇四五	一,三三三,四四四	一,三〇四,一六四	三,三三九,九三八	一,六八九,三〇〇
六〇—六四	一,一八七,〇九二	一,一〇,一九九	一,一七〇,一八二	一,一九九,五三三	二,四四四,七〇三	一,三三三,一三三
六五—六九	一,〇七三,〇三三	一,〇八二,七五五	一,一〇二,七五四	一,一〇九,八二二	一,九九二,五四六	九二六,三三六
七〇—七四	九三三,四三三	九二九,〇〇〇	一,〇二二,四七七	一,〇一五,四八八	一,四六五,八八九	六二六,五九九
七五—七九	五六一,八〇四	五九二,九七五	六五四,七七〇	六八五,四八八	九四八,二二二	三七三,九六八
八〇—八四	二六三,九九七	二六八,九七六	二八五,六一一	二八四,〇三三	四四三,六三三	一四八,三三八
八五—八九	一三三,三三三	一三三,三五五	一三六,二三〇	一三六,七二四	二二八,五八三	三七二,九九〇
九〇—九四	一四,六二二	一〇,七三七	一三,〇三三	七,七四五	一七六,三八	五,三〇九
九五以上	一,七六五	一,一六三	二九六	一一〇	五九三	二六

年齢級	昭和四〇年		昭和五〇年		昭和六〇年	
	男	女	男	女	男	女
總數	五,一〇七,八八八	五,〇〇三,七一九	五,六〇三,七三五	五,四九六,三二五	一二,八〇三,〇〇〇	五,九五〇,八三六
〇—四	五,四二四,九六六	五,一六四,七〇〇	五,三三七,五六八	五,〇〇六,三三六	九,九〇五,一三四	五,〇九九,五七五
五—九	五,〇三〇,四八〇	五,〇三三,三三九	五,二二九,四六六	四,九〇七,一五七	九,七三三,七九三	四,九六一,二六〇
一〇—一四	五,〇五八,八八八	四,八三三,五三三	五,一八二,二二五	四,九八八,九五九	九,七八四,〇〇三	四,九九六,二八八
一五—一九	四,七六四,九三四	四,五五八,八九三	五,二二二,二七七	四,八九五,〇八八	九,八三三,四九九	五,〇三三,〇三三
二〇—二四	四,三三〇,四七七	四,二二七,八八六	四,八八四,三二〇	四,六七三,六六四	九,四四三,五八七	四,〇〇五,九三七
二五—二九	四,〇七三,三一一	三,九二八,九〇四	四,五三三,八一五	四,三四九,七五四	九,四六七,七六五	四,八〇七,四六九
三〇—三三	三,八八三,八四九	三,七九三,八八九	四,四一九,九三〇	四,三三三,二二八	九,三三〇,一〇	四,六六一,〇九
三五—三九	三,七三三,四四一	三,六三三,六六六	三,九三三,四四〇	三,七〇一,一五八	八,五三三,〇三三	四,三三〇,〇三三
四〇—四四	三,三七三,三九九	三,一八三,九五五	三,七九二,一八八	三,六三三,三四三	七,八三三,六六一	三,九六六,六六五
四五—四九	二,六九二,七七八	二,六四四,五〇〇	三,五二一,六五六	三,四三〇,五五八	七,三三三,一〇一	三,六八四,五五八
五〇—五四	二,四〇七,二一九	二,四四三,三三三	二,九六二,三〇四	二,九六五,九九八	六,七五五,八〇〇	三,三三一,八四八

將來人口の計算に就て

年齡級	昭和七〇年		昭和八〇年		昭和九〇年		昭和一〇〇年		
	總數	男女	總數	男女	總數	男女	總數	男女	
五五—五九	三,九八〇,二六	一,九六八,一九	二,〇〇九,八〇	四,七〇三,三三	二,三三三,一八	二,四〇〇,一九	六,一四二,五八	三,〇八八,七六	三,〇五三,八二
六〇—六四	三,四七〇,九八	一,五八六,〇八	一,八八四,九〇	四,〇八三,五五	一,九五〇,五九	二,一三二,八五	五,〇〇四,二六	二,四九四,四四	二,五〇九,八二
六五—六九	二,四七〇,三六	一,一七四,三三	一,三〇〇,九七	三,〇九四,五〇	一,四四四,九四	一,六四九,五六	三,七三三,二七	一,七〇九,五五	二,〇〇〇,一六
七〇—七四	一,六五二,九〇	七五七,〇九	八,九八六,九〇	二,二八八,九八	九,九六六,八八	一,二九九,九〇	二,七五七,三六	一,三九九,九九	一,〇〇七,三六
七五—七九	一,〇〇五,三〇	四七〇,八二	六,七〇七,六〇	一,三七八,九九	五,八五二,四六	七,九六八,四六	二,七五七,三六	一,三九九,九九	一,〇〇七,三六
八〇—八四	五五〇,六三	二〇五,〇七	三,五五七,六七	六,七二,三三	二,六六七,四四	四,〇〇〇,三九	八,七五七,七七	四,〇〇〇,三九	四,七五七,七七
八五—八九	二二九,〇三	六七,〇三	一,四八八,六六	二,五三,八七	八,六〇二,一一	一,六二,八八	三,八〇〇,四四	一,三六八,八八	二,四三一,五六
九〇—九四	三三三,三七	一〇,五三	一,〇三,三四	四,八三,三七	一,五七,三三	三,〇〇,九四	五,九四三,三三	二,〇六,三三	三,八八三,〇〇
九五以上	一四九,三	五〇,一	九〇,一	四,八三,三七	一,二五,一	三,〇〇,九四	三,八〇,九四	一,〇〇,九四	三,八〇,九四

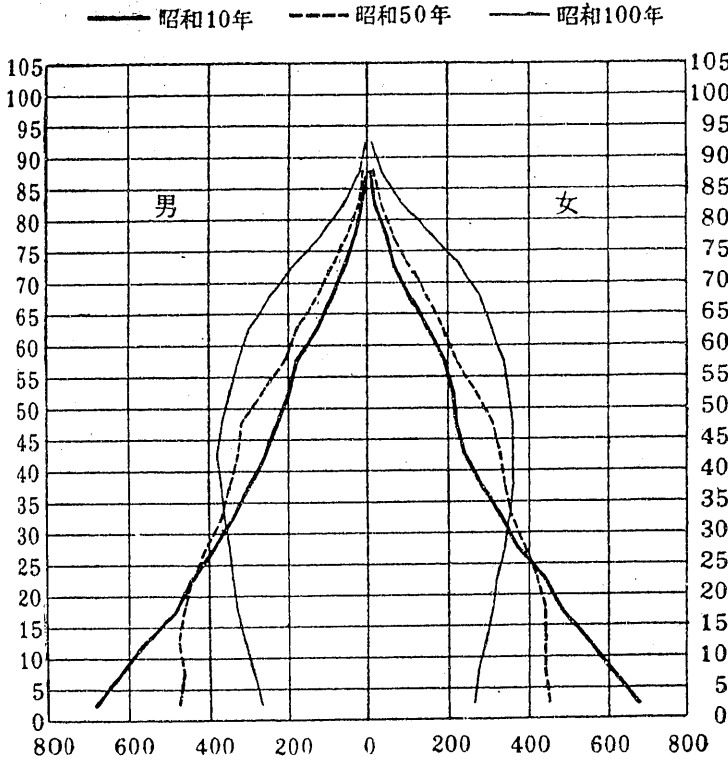
年齡級	昭和七〇年		昭和八〇年		昭和九〇年		昭和一〇〇年	
	總數	男女	總數	男女	總數	男女	總數	男女
〇—四	三,三三三,三三	一,六六六,六六	三,三三三,三三	一,六六六,六六	三,三三三,三三	一,六六六,六六	三,三三三,三三	一,六六六,六六
五—九	九,二九九,二二	四,六四七,一一	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
一〇—一四	九,四九九,九八	四,七四七,四九	八,三〇〇,〇〇	四,一五〇,〇〇	七,二〇〇,〇〇	三,六〇〇,〇〇	五,六〇〇,〇〇	二,八〇〇,〇〇
一五—一九	九,五〇〇,〇〇	四,七五〇,〇〇	八,三〇〇,〇〇	四,一五〇,〇〇	七,二〇〇,〇〇	三,六〇〇,〇〇	五,六〇〇,〇〇	二,八〇〇,〇〇
二〇—二四	九,四九九,九八	四,七四七,四九	八,三〇〇,〇〇	四,一五〇,〇〇	七,二〇〇,〇〇	三,六〇〇,〇〇	五,六〇〇,〇〇	二,八〇〇,〇〇
二五—二九	九,二九九,二二	四,六四七,一一	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
三〇—三四	九,三三三,三三	四,六六六,六六	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
三五—三九	九,〇〇〇,〇〇	四,五〇〇,〇〇	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
四〇—四四	八,七六六,七七	四,三八三,三三	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
四五—四九	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
五〇—五四	七,一七七,九九	三,五八八,八八	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
五五—五九	六,四八八,九九	三,二四四,四四	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
六〇—六四	五,六六六,六六	二,八三三,三三	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
六五—六九	四,七七七,七七	二,三八八,八八	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
七〇—七四	三,四七七,七七	一,七三三,三三	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
七五—七九	二,六七八,七八	一,三四四,四四	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇
八〇—八四	一,八八八,八八	九四四,四四	八,〇〇〇,〇〇	四,〇〇〇,〇〇	七,〇〇〇,〇〇	三,五〇〇,〇〇	六,〇〇〇,〇〇	三,〇〇〇,〇〇

八五―八九 四〇〇、七三三 二九、〇三四 二六、六九六 四一、六九六 一六、〇〇〇 一六、〇〇〇
 九〇―九四 五五、七〇六 二六、〇〇元 四九、六九六 九、七三三 三三、〇〇〇 三三、〇〇〇
 九五以上 四八、二二二 一、九四五 二、八六七 六、〇九六 二、四〇一 二、四〇一

上表中昭和十年、同五十年及同百年の各年人口年齢構成状態を圖示すれば次の如くであつて、昭和五十年の分は第六回生命表に依る静止人口の年齢構成状態（本誌前號「安定人口の計算」参照）に類似するものとなつて居り、又昭和百年の分は現在何れの國に於ても見るを得ぬ如き若年人口の少数、老年人口の多數なる年齢構成を示して居る。

第二ノ假定ニ依ル將來人口ノ年齢構成状態

(總數 10,000ニ付)



以上に示したる將來人口は何れも一定の假定に依るものであり、而して前述せる如く此の如き假定が將來實現し、此の人口が實現すべしといふも

將來人口の計算に就て

三三、五二九 六〇、八〇六 三二、五五五 三九、六四一 六五、七五七 三三、〇六九 四三、六六九
 六四、五三三 一九、二九三 四〇、五六一 七八、九〇〇 三二、八九七 四四、六五七 八七、三四三
 三六、九四四 七、四三四 二、九三三 四、四九一 九、〇三二 三、五九六 五、四三三

のではない。今事變に依る影響といふことを考へても、此の假定は、其の實現といふことを考へるに於ては、幾多の修正が加へられねばならぬことである。以上の將來人口の計算は、其の基礎となるが如き假定の下に於ては將來人口は此くなるべきことを與へ、人口對策の一資料となることに其の意義を有するものである。

英蘭及威爾斯の將來人口

(イニッド・チャールズの計算)

年次	第一推計	第二推計	第三推計
一九三五	四〇、五六三	四〇、五六三	四〇、五六三
一九四五	四〇、八七六	四〇、三九二	四二、三三八
一九五五	四〇、二〇七	三八、七七七	四三、六五一
一九六五	三八、五〇四	三五、七九九	四三、七七四
一九七五	三六、〇三八	三一、四五二	四三、〇二一
一九八五	三三、一〇六	二六、〇八七	四一、六一二
一九九五	三〇、〇一九	二〇、四四〇	三九、八七一
二〇〇五	二七、〇九〇	一五、〇五八	三八、一七七
二〇一五	二四、四六七	一〇、四五六	三六、六四六
二〇二五	二二、一二一	六、九四〇	三五、一〇四
二〇三五	一九、九六九	四、四二六	三三、五八五

(詳細は五頁参照)